

牧野富太郎「牧野富太郎書簡」

大正7（1918）年11

月26日

謹啓 時下益御清

穆おわたりならるべくきんがに御渡可被成奉

欣賀たてまつり候。然しかれば去る十

月十七日附尊書被投とうぜられ

拝誦つかまつり仕候。折悪敷過あしく

日来頻々ひんびん神戸へ

参り滞在致し候

為め、荏苒じんぜん御返事

延引誠きいにそむきに背貴意

候段幸くだされに御海容被下

度候。扱さて御尋ね合せの

「望春」は「辛夷」の一

名にて此辛夷は和名

「いぶし」と称し喬

木（小柄の）に御坐候。此

「こぶし」は木蘭并ならびに
ハクモクレン

玉蘭の属にて我邦

にては諸州の山地に自生

し、東京附近の地にも

これあり有之。春早く葉に先

だちて可なり大なる白

花を枝上に開き香氣

これあり有之候。花了りて新葉おわ

出で申候。花形并ならびに葉

形略ほぼ左の如くに御坐

候。

*

*

先は乍延引えんいんながら右御返事
迄かくのいづく如此に御坐候

拝復

大正七年十一月二十六日

牧野富太郎

緒方益井様

ぎよくとうか
玉榻下

なおも
尚若し実物御入用に

御坐候へば、来春花期

に花枝御廻し申上べく

候へば、御用捨なく御申もうし

こしくだされたく
越被下度候。